

# ハートマウンテン 文藝



創刊號



目録

發刊を祝して	原信太郎 1	詩經の花	良秋 29
フランテムと禪	千崎如幻 2	小光の草原	森澤達夫 30
俳句祝文藝發刊	阿世賀海 5	小山吟社句抄	葉青 選 31
詩冬來る	良秋 6	詩友情	子シンタイモ 33
發刊隨想	太田敏夫 7	詩土に還る	良秋 34
俳句	藤岡崑隱 9	蓬内海の思出	岩室 寺秋 35
隨筆趣味の生活	榎橋京二 9	童話雪の朝	良秋 39
俳句	藤岡細江 10	鈴蛇の獨語	鷲塚生 40
心續歌	高柳沙水 11	編輯後記	42
會作品	神無白集	ハトマシラ	43
木下	植村文澤 解説	川海社作品	「雜詠」
大野	元吉 漫 23		
筆ペンとメカネ	藤岡細江 25		

發刊を祝して

原信太郎

人生の先覚を祭に感じて之を文字にあらはしたり、或は想像の翼を駆りて、宇宙の事象を如実に表現したりしたものが、詩であり、歌であり、小説であり、其の他の文藝作品である。私達はこれを総稱して文学と云つてゐる。

色々の見方はあらうが、私は文學を情緒の世界に於ける個々人の尊い体験であると信ずる。むしろ人生そのものであると解してゐる。かくて其處に純真と獨創とが生れる。不斷の努力と真劍な態度とが要求される。徒に肉人の囁語と亦り筆先の遊戯と墮したくまいと思ふ。

此センターでも若い人達に依つて文藝雜誌の刊行が企てられてゐる。誠によい事と思ふ。全く異つた環境に置かれて常に脅されたり荒み切つたりしてゐる私達の情緒が、之に依り幾分ふりとも培はれて行くあら幸である。

シヨウペン・ハウエルはいつでも演説をする時「諸君よ」と呼びかゝる代りに「メトライデンデ」即ち「困苦の唯中の戦友よ」と叫んだといふことである。佛教徒もこの世界を苦しい處つらひ處と観ずるのであるが、釈迦をはじめとし、歴代の祖師たち、特に禪風を拳揚した人々は、天下の道友に向つて「菩薩がたよ」と呼びかけた。

梵語ではボデー・サトヴァ、巴利語ではボデー・サッタと云ふのを支那音に書いた時其の第一字と第三字とを抜つて菩薩としたのである。地藏ボサツとか観音ボサツとか云ふて金箔を置いた木像や石や土で作つた彫像などは菩薩であつて、何れも各等の生活とはかけ離れたものであると考へる人々もある。こゝろ運中のことを暗愚菩薩といふて、

坐禪の仲間入りが許されぬといふのである。

ボデーといふのは大道のことである。真理のことである。サトヴァ或はサツタといふのは有情といふことだ、修行の可能性ある人向を云ふのである。それ故ボサツとは大道を洵歩する人といふことにある。真理を体験し實現する人といふことである。だから自覚めたる現代人は悉くボサツである。碧い眼のボサツ、黒い眼のボサツ、發明をするボサツ、新聞記者ボサツ、巨人ボサツ、政治家ボサツ、映画俳優ボサツ、ブック・キーパーボサツ、タイピストボサツ、農業のボサツ、商工業のボサツ、母のボサツ、主婦のボサツ

(2)

ツ、教へ来ると限りは無い。つまりこのライフと云ふものゝ真相を研究して、健全なる人生觀を築きあげ、それによりて自分の仕事を世界の福祉のために貢獻しやうと考へる人々は必ず悉く大乘佛教の菩薩である。それ故キリスト教徒の中にも幾多の推薦ボサツがあり、佛教僧侶の大部分は實は落第ボサツなのである。

戦時非戦時を通じて概観すると、アメリカ人の生活はめまぐるしく忙はしい生活である。誰も彼も旋風の如く活動して、何かの建設をやつてゐる。だが、一体その理想とするところは何かであるか？ 所謂ダラー・ガッドの崇拜はあらぬ浮名を流してゐるのであつて、アメリカ人の国是としてゐるところは、單なる物質主義下には無い。成功の哲学、精力主義の敬の基調とあつて、眞のアメリカニズムを發揮してゐるのはアラグマテズムであつて、其の根底のヒューマニズムは現代の思想界に一異形を放つてゐる。アラグマテズムは人向を中心として立つてゐるのであつて、人向以外の神怪不思議を尊重しなさいのが其の特色である。天地万物を其の儘人間の領域と見やうとしてゐる。これが正しく大乘佛教一特に禪佛教と共鳴してゐる。梵網經の中に「汝等はこの世に成らんとする佛、吾はこれに成れるの佛なり」とある。釈迦の教を奉ずるものは皆悉く未來の佛即ち菩薩である。釈迦は其の禪定の力によりて大悟して佛となり、我等に其の先例を示したのである。釈迦は其の時「奇なるか

(3)



亦一切衆生如来の智慧徳相を具有す」と云つたのは、吾等に未来に於て佛と亦るべき可能性があることを証明したのである。未來と云つたからとて、死んでからあとの話ではない。今喋つてゐる、今聞いている、この心、このからだ、其のまゝ佛と亦るによいのである。この世界を離れた浄土や天国に行きて佛と亦るのではない。月あり、花あり、樓台ある台等の現實の世界で佛と亦るのである。義に勇んでは血を流かし、情に感じては涙が流れるこの人間生活を其の儘佛の生活とするのである。若し經文を読んだり、お寺詣りをしたりするのが採香臭く、いやだと思ふ人は、アメリカ名物のプラグマテズムの思想を研究して、あそこから禪に入つて来るがよい。禪が手にはいたり、經文もはつきりゆかり、お寺詣りの真意義も了解出来るやうに亦る。あらぬ浮名を輕信してアメリカは拜金国だなど、侮蔑しては亦らぬ。

一体ヨーロッパ人はアメリカの思想界を馬鹿にしてゐたものである。十九世紀の終に近づいた時でも、アメリカの哲学は他の国の思想の影法師であつて、この國特有の哲学といふものはないと云つてゐた。然し其頃からアメリカに特殊の哲学が芽生してゐたのである。それが廿世紀の春までうら若きに、とうく、蕾を破つて咲き出した。その哲学の花はプラグマテズムである。プラグマテズムは現實の哲学、實用主義の哲学として評判せられてゐるが、其の思想の

根底はいつしかアメリカ人の精神的基礎となり、哲学事と云ふことを全く氣にとめぬ人だちでもこの思想によりて人生を觀、この思想を自分の立脚地と定めてゐる。この實際主義の哲学は精力的主義の福音となり、成功といふ現實世界の天国を築きあげてゐる。アメリカのビジネスにとつしりとした庶力のこもつてゐるのはこの哲学が尻押をしてゐるからである。アメリカ人が忍耐に忍耐を重ねて、色々の發明をしたり、各種の改良進歩を計つてゐるのはこの哲学が隱然として指導者と亦つてゐるのである。(次号完結)

祝 文 藝 誌 祭 刊

十日 阿世 賀紫海 ⑤



高峰に映ゆる日の出や雪ほのか

摘いの紅糸に更くる秋の夜

高峰を背に千軒の秋の月

呼び返す研にゆるく秋の水

せ、うぎに足を止むる谿もみじ

高嶺の裾に痛がる秋館



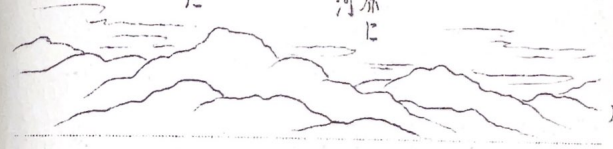
詩  
冬 來 る 良 秋

漂渺……  
ロッキー高原の  
灰色の中に  
わが佇めば  
静寂を破る  
音も亦し

こゝ、ハート嶺の原に  
爽々と流れし運河  
今は涸れて  
雜草に鳴きし  
蟲声、今いづこ

水牛の背にも似た  
丘陵は続りて  
寂寞として  
瘵人の如く  
死人の如し

その古



こゝハート嶺の原に  
疾風の如く  
幻の如く

馬上に馳せし  
アメリカカン・インデアン  
頭上の羽毛は  
荒野に映じ、あうん

忍べ、忍べ  
地上は白雪に埋もれて  
長き冬眠の時は来れど  
また来る春を  
耐へ、待たう

彼の蟋蟀は  
短い秋の季節を  
命の限り鳴き續けて  
滅び逝ったではあいか

祈らう、祈らう  
更生の春の曙の  
早からんことを。

⑥

祭 刊 隨 想

大 田 敏 夫

一萬に近い人口を有する我がハート山セントラルに相當多  
数の文藝人が居る事は當然で、然かも歌壇、俳壇に幾多の  
良き指導者を持つ事は我等の喜びであり誇りとするところ  
である。これら文藝人に依り文藝雜誌が生れるであらう事  
は久しい間の待望であつたが愈々文藝に興味を有する人々  
の手に其名も「ハート山文藝」と名乗つて豪華な創刊号を  
出すに至つた事は誠に喜ばしい次第である。大体に詩とか  
歌といふものは繁華を都會生活より寧ろ冥想、思索に相應  
しい田園とか山野の生活から生れる様に思ふ。此意味から  
いふとセントラルは都を遠く離れた曠原の涯にて壯麗幽邃な  
ハート山を背景に四季を通して、清冽な大気に恵まれた自  
然境である。此處に優秀な文藝作品が生れるであらう事は  
大いに期待出来る様子がする。幸に幾多老練新進の文藝  
人諸氏が精進されて立派な作品を續々と發表し、無味乾燥  
亦我等の館内生活に心の糧と情標の潤ひを興えて頂けるか  
ら大なる喜びである。「ハート山文藝」は颯爽たる姿をして世  
に出たが是を繼續する事は容易な業ではない。世俗に雜誌  
の三号と言つて二号並に出るが其後が續かぬ例が屢々ある。  
同人諸君は此處に注意し、四角生れたものは何處迄も續ける  
覺悟と同胞社会に一つの非難力と希望を持つ立派な文藝雜  
誌に育て、賞ひたい。編輯者の苦心努力に対し深甚の敬意  
を表し創刊を祝する次第である。

⑦

俳句



藤岡無隠

霜柱踏み碎きつゝ球を蹴る

種々の秋の萩の籠りや戦勝國

秋風や空啼き渡る大鴉

遠方へ友後り行く秋風裡

秋晴れの天翔りゆく鷹一羽

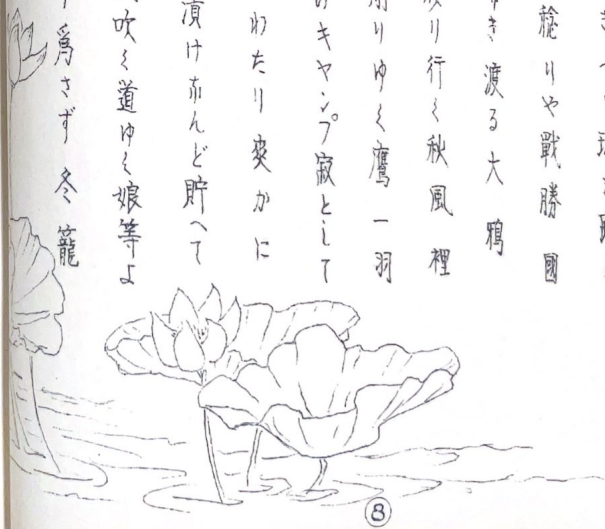
星月夜配所のキヤンプ寂として

曙の空澄みわたたり爽かに

安らかに莖漬け赤んど貯へて

脛露らね北風吹く道ゆく娘等よ

何事も思はず為さず冬籠



(隨筆)

趣味の生活

細橋康二

人間は趣味に生きると云ふが全くその通りで、何の趣味も持たぬいと云ふ人は恐らくこの世の中に一人も無いであらう。その趣味にも色々あるが共通の夫では男子は金を儲けやうと云ふ趣味、婦人は美服を好むと云ふ趣味は一樣であるやうである。

今日吾々は收養所生活と云ふ変態生活をしてゐるが爲、趣味も色々の方面へ變化して行くのである。

私の近所に住んで居る黒尾君はこの夏鈴蛇を捉へて来て飼ふと云ふグロテスクな趣味の持主である。来る日もく鈴蛇捕りに野山を探し廻り昨日は何足捕れた

今日は何足捕れたと喜んで聞くも恐ろしい鈴蛇を金網の中に入れて尾の先についてある鈴を振る音に快味を感じると云ふ趣味の人である。ところが鈴蛇を飼ふて置くと云ふことは危険であるとの理由でオアイスから禁止命令が来るどう仕末をしたのか兎に角一疋も居ないやうにやつた。

⑨

それから数日後その金網の中に鈴蛇の代りに今度はチイプモンキーと云ふ私が見るのが始めての水さい動物が入れられてゐる。之は又鈴蛇と違ひ愛嬌たっぷり亦動物で猿のやうに前足が手の働きと同様で何かの果實をやると後足で立ち前足で持つて器用に殻を割つて中味を食べるのである。その合向々々には白鼠のやう



に車を廻す筈も一通り見せて呉れる。  
 或日阿主の黒尾君は澤山ホキヤンタローアの體を日向に干して居る處を見た。ハ、ア、チイア、ミンキの餌にするのだホあと思いた。飼主はこの小動物の爲にあれこれと好きさうな果實を集めて来て可愛がるのである。此の箱の中に居るへすれば何不足なく、外敵に襲はるゝ心配も亦く安樂に生活がして行かれるのである。

その事が丁度我々の今の境遇と一脈相通する處があるやうに思へた。吾々として今衣食住のことを政府から支給されて安樂に暮して居るやうにバーブワイヤーのフェンスの外からは見えぬのではなからうか！

が矢張り外部で汗を流して働き、貧乏世帯をやりとりする方が何程よいか知れんと思ふと、この小動物も矢張り広い野原で自分で木の實を探して穴の中に寝るにして、その方が彼には何程楽しみであることであらうと思ふた。

俳句

藤岡細江

四男志願并に覺つ 七句

新緑のハート毅然と立てりけり  
 兵と平りし子の衣履きぬ秋の風  
 屋月夜遠き昏管に在る吾子よ  
 朝寒の眼に映り野營の子  
 女の子に送る色に莖一瓶  
 顔寄せて讀む兵の文秋灯下  
 感謝祭彼に我勇の花買あり  
 明治節唯默然と籠りけり  
 仰ぐりなく祈願られぬ明治節  
 芭蕉思や東漸禪窟此夜に在り



心積短歌会作品

神無月 佳永

高柳沙水選



夜半ゆかき眠りまますと打つ鐘は火事を告ぐる我がメスの火事を  
 夜半ゆかきくけたましましとも叫ぶ聲耳メスの火事をば告ぐる急心あり

もの亦べて焼き盡くさむと燃えさがる焰猛蛇の舌と狂へる。

つき〜にわん孫小えて老いらくの字をたのしみ君のま火しき



二十 小池代治郎

ヤローストーンの大浴谷に我立ちていよいよ小たまの乳を感ず

秋雨の夜半日やめしか旅にある子を少と思か出でて眠らず

遅しきからだと亦りて来し吾子の軍服涼々し秋晴れのけし



二 藤橋 宗二

ほの白う精む雪映えて帰りゆく月無き夜半の道の明るさ

ワータイム午前七時の暗闇をすてに仕事に行く人のこゑ

ハート嶺に申ける夕雲しめじみと繪此あらぬわが身さびしき



一 医 岡田 溪水

新同の歌壇に請めてかつかしもまよきくいます三保周等小の君  
この宵のラヂオはつひにバルカンの急をぞ告げて聲年あはたせし  
戦はいよいよ進むにせいらくくの枝はひた待つ迎ひの船を



一 医 岡田 文枝

隔離所に移され行きし若人ら皆元氣よく夕入みつ夜涼し  
おこりてはふらじと此ひきしめて来しギヤンテンにはやも物買か  
たふはる大ハロッキーに夜ヨ白ういよいよ寒きみ冬いたりぬ



十四 医 内田 静

ハートマウンテンの海拔五千尺に来る冬を白が身いたはり耐へかんとす  
ワイオミンの地にあるものはことごとく白ひと色の冬のな寂しき  
センターの曉崗にやめて思ひ馳る来たらむ世の黎明を  
我が思ひ事ごとく神に告げ心かろがる我は朝顔す

二十九 医 小 穴 めん

花たむろしきり動かすビーひとつ鐘武者にも似て遅しき  
風と共にいづくにか去るころろと行方も分かんずブリングウイード  
結び目にこもる心を切りかねて手にを解きけり奇縁の小色



二 医 福澤 葉子

朝の雲今は晴れたり車窓遠く見ゆるはハートマウンテンにか  
常見まく欲りたしハートマウンテン朝雲のひまに現はれにけり  
初めてを仰ぐハート嶺一萬の同胞の生活守るがに立つ

13



九 医 富田 ゆかり

ツールレーキをけくは去るべしつひにまたキヤスルロックを見る日は無けむ  
山川のたふろまひはもかはらぬに同胞幾萬いつの日帰らむ  
山のさま川の流れも亦つかしと移動列車下に聞きまきしぐむ  
同胞の戦時悲劇を秘めにつミゾラは朝の露粉にしづけし



二十匠 深谷百合子

通りゆく運命わがしも荒原のハートマウンテンにけり来り住む  
すまにして遠来木しものかたははる山のすがたの赤入り目立つも  
同胞の赤べて忙び住むセンターは赤丸山よろし小丸野の赤るべし



二十一匠 山寺日鶴子

おほかたの收穫すみてかにかくも試作一年の秋は暮れつゝ  
收穫はセラに満たしてセンターの長きみ冬に我等ぞよへつ  
早出せし産相の朝の農園に凍て草木切り兼取畔に焚火火す



一匠 木津 康

セイジをば焼きし煙は手を洗ひ川の柳の枝に赤づき  
をすも赤子赤せこに求て物言はぬと黙せる秋に顔寄せ来る  
センターを出でてタイヤのひちびちと鳴るがともしき道走りゆく  
険しがる雲行き見せし集會も捨凡の萬点かきりて笑へり

二十九匠 松本源之助

秋も開けて朝の畑にとる畝の石をば打さし音り寒けさ  
北国は赤霜降る早一秋が愛む花のいくつは空に育つ  
風風々々日も暖か午過ぎを淡紫に山の雪映ゆ



十四匠 野村よしを

風雪と戦ひぬきてセンターのソーキングスクール級進みけり  
赤子病め二週月を経ぬ秋の夜をすすぎものする水の寒けさ  
人の世に絶ゆる日無けむ戦の初といたましき世相思ほゆ



二十匠 木村夢生

ハート出領の吹雪に暮れし夜を明けて大ロッキーの赤出すすが  
ハート出領の沙漠の中のバラックに巣をば登る必雀子かふし  
食がる肉も早くかるとるかに味のよき二とせがりの鮭の刺身



二十八匠 河野千嘉太

待ち侘びしツルレーキの友見えて我等かまどの朝夕にきほし

カミのフイックにきいて投げあぐる豆設の山屋根より高し  
センターをはじめて出でて秋ふかきパウエルの町こひとりまよふ  
船のふかに馬牛豚と睦めるを見れば何かは人の争ふ



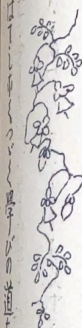
二十九區 松本登美子

朝の湯のすがすがしやわが心身まきやけくと洗ひ清むる  
朝風の涼しき空にまじけづる髪さはやかに流けてうれしき  
我がはぬし沙市にまじしと聞きてさへ思ひやつがし歌友三人



二十九區 本森岡松緒

圍はれて心は委えむとする我を神のみ力常にむちうつ  
バラックのさ度赤がらもタリヤの花色とりどりに匂かともしき  
夕映に色美人しき雲をぬき名畫とうかが雲のハート出領



二十九區 山本保

十五區 丸執かはま子

ひととせのもつれも解けて来々春を歌舞舞に帰る日行向うれしき  
ぬが老を師はのたまへどまひとたび演じてみたし雪の浦甲斐  
ましぐらに吹雪のよかかを衝きてゆく師のいたづきの寫しと知れは



二十四區 青山洋子

遠稻妻甲斐雲斜に貫けは夏及の沙漠の夕闇に映ゆ  
立日月羽根のかたよの雲向よりすべりて雪のロッキーに没る  
枯れがれのセーシンの間ゆ草の穂がかはりと能びぬ山の秋晴れ  
山風寒しとま言けばシカゴより街の埃の憂しと消息

17



二十區 角皆巳之吉

山茶花きるんがきて友はその臂に歌作れとや我を招じぬ  
捨てし石またとりあげて試みるしがすかし眺めてにつこと空みぬ



二十四區 小川悠々

この朝を山登粉りかし逆りゆく峡にとどろく大瀧の音



二十區 松尾 壽郎  
親のこと沁めて思ひゆぢずと暮詰てせむ平一和来らば

ハート出領の朝空透えてストーブの煙立ち立つみ冬来りぬ



一日に一つの歌を詠まむとぞ思ひのみにて過ぎぬ月餘を

糸エリかへしギヤスステーションの白壁には鳥の紅葉の赤や美し  
前みづまへにさしては北にと軍命のまにま再び秋に會日にし



九區 豊 留 たか  
明日の日の住まひは知らぬハート嶺にスナイトピートの種集めけり

木枯らしの吹くこのころをハート出領は落葉する木のひと本どを無き

隔離所にゆき子等の訪問ぎ居れば汽車の旅をばたのしむらしも



二十二區 船 越 茂吉  
胸衣きの隙をば摩りて仰ぎ見ればハート出領の船が前立立つ

底のさへりのかぬ断崖を真下ににやうつと身がたは立ちすくみける

二十區 海老原 直子  
働きて學にいとむむ女子のため疾く起き出でてストーブを燃火く

列風はいつしか止めて秋 今宵ハートマウンテンに照る月清し



二十七區 横田 五作  
センターに残る身さびし交換の船にて帰る君を思へば

ロッキーの空解の水を沸かしたるお茶いただきて歌詩りすも



二十八區 橋爪 心入  
ひさびさの今朝の大雪子餅等の喜び騒ぐ聲にきやかき

廿一區 香前 寛太郎  
笑顔もて我の料理の品々を食うがる見れば訪らしにくして

つが亦くメスの仕事もすましたれ夜學に行かむ思ひたのしも

二世の部



二十區 服部 佐津子  
子は親の反映赤りと思はえは自が習性のかへりみらるる

岩山の絶景絶えず展け出て我れ送迎にいとまもあらず  
ハルスタインの聖都萬里の長城をもさながらに見すシヨーション道路  
パンゴホーが突の如く汝を満きし情熱を思ふ向日英の花  
太陽に向きまゝ動せん汝が能く度我にもあれ亦向日英の花  
マローストーンに秋はまにけりゆき寄せし松の枝を吾れを打つ雨の音



二十八 藤川富子

道のべの踏まれし花も踏まれたるままにかとけく憂をにつけにけり  
夜の静寂を夜にもたれ消し難き心の痛み思ひれづらう  
朝早くメスの穴より降り降る雲を月丸つし思ひ立ちしとくに  
ツル・レーキに去りにし汽車の穴の邊に消えける姉の面をえす



二十一 内田君子

言吾れはなげけぬ言ふ前にあはれすべからぬこみあぐるもの  
しつとりと濕りすがしき朝の土に踏みゆく此の友と  
塵によごれし野菜畑をすがすがしと洗ひし昨夜の秋雨  
あかときを屋光澄のり地の上は雪がとまがらば日き初夜箱

服部 尚之

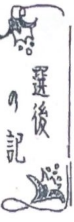
みこもれる妻を愛しみバラックの北窓つがし寒にそ亦へぬ  
英文のり。ポト書けば若き日のおのれの無房の袴と身を責む  
新入部員借猫のごとひそみろしが癒すおもむろに瓜あらはせむ



高柳 沙水

ツルレーキの騒ぎつがさと知るすべし千原博愛子等如何  
にか居らむ

鐵柵の中に明暮たつ嘘半尾に錆つて傳はる運し  
園々を組上にのせて偉い亦る時の力は苦笑するにか



高柳 沙水

心精短歌会も創立以来正  
に半歳。爰にこの一輯を本  
誌におくることを衷心欣が  
たい。その間、有力な会員

漱氏を或は日本に、或は他  
のセンターに送つて、聊か  
さびしい思ひをしたのであ  
るが、新しく加はった会員  
諸君の精進は、よくそれを  
補つて餘りある實状である。  
一道修業の苦心は決して並



大他事ことではあり、  
 必らず其苦心と闘つてゆく  
 ところ、所謂修業の尊と  
 さがあるのであつて、この  
 輯のうちの何人が今後その  
 苦難の道に抗まざる歩みを  
 續けて行くかといふことは  
 私にとつては何よりも興味  
 ある問題である。  
 作歌の要訣は九  
 七、五、七、七、の  
 三十一音の形式  
 に見たまひの感  
 動の中心を日常  
 の言葉で自然に、  
 素直に表はすことにあるの  
 であつて、一般の人の考へ  
 る程、難しいことでは無い。  
 古来歌は童心の所産である  
 といふことも畢竟自然に、  
 素直に詠めといふことを云  
 ったものであらう。

私は今、無味乾燥亦現在  
 の生活の心の糧として作歌

心嶺短歌會々場  
 第十四回六中央南刺堂  
 歌会期日 毎週水曜日 午後七時  
 及 日曜日 午後二時  
 同好の士の来会を歓迎す  
 事務所 廿二回十九日 高柳宅

を志す人々の為、一當一次  
 に備せず、廣汎に歌壇に指  
 標をおき、会費相互の作及  
 研究と、有力な先進の作に  
 學ばしめることに依り、脚  
 か徹力を盡して居る。歌會  
 創立以來まさに六ヶ月、私  
 の其の指導方針の結果が、  
 この輯の何れか  
 に現れてゐたま  
 うば私の本懐ま  
 た之に過ぎたも  
 のは亦いのであ  
 る。

尚當センター  
 の文藝人間の永い懸案であ  
 ったハートマウンテン文藝  
 の縮合誌が、岩室吉秋君  
 石郷夫人の努力とセンチネ  
 ル日本詩部の援助に依り、  
 今日こゝに立派な實を結び  
 得たことに衷心謝意を表し  
 且つその成功を慶賀するも  
 のである。

木下空太郎の藝術文学解説

元吉 優

こゝに私は木下空太郎の藝術を、許さるゝ範圍に於て解  
 説する。それは鑑賞への準備であり、同時に氏の藝術を識  
 る爲の参考として頂々事を考慮した。東京帝国大学医学部  
 皮膚病学主任教授、医学博士太田正雄先生、と云へば嚴めし  
 いが、桐下亭主人又は木下空太郎といへば懐しく、私は氏  
 の藝術を喜び、愛せざる得ない。

氏は明治十八年八月伊豆伊東に生る。東京帝国大学医科  
 卒業。東北帝国大学医科部教授を勤め、かつては満洲奉天  
 南滿医学堂校長をも勤め、そして外遊した。

かつて北原白秋は、その歌集「桐の花」に於て、佛蘭西  
 印象派の手觸と技巧とを生かして、所謂緑の古宝玉として  
 の短歌道に、一種の漸進にして清澄な空気を送り、又永井  
 荷風は、彼の青春時代二十五才の秋から三十才の春まで、  
 丸五年を西歐で暮らしたが、帰朝後その瑞々しくして甘美  
 なる文章に江戸趣味を生かして小説「すみだ川」を書き、  
 小島政二郎の言ふとほり、さながら一幅の風俗畫を残した。  
 實に、木下空太郎の藝術は、そのエキゾテシズムを特長  
 として、所謂南亞文学に始まる。可天草組は、その代表  
 作であつて、その中の「黒船」、「長崎がり」、「あこがれ」  
 「棧留稿」、「あまくさ」、「波羅章緒」等は佳篇である。こ  
 れ等は明治四十年頃の詩作に属し、即ち北原白秋の「邪京

門」と同種類のものである。当時、氏は新詩社の興野鉄幹氏や歌人吉井勇氏等と共に天草に行つたが、「あこがれ」は「天草四郎」の劇詩の一部とのことだ。姉と妹とが、南支那から印度に渡る航海中の可憐な対話あり、志は難き佳篇である。その項代はその詩作を「明星」に発表したが、北原白秋、長田秀雄、吉井勇等と共に「屋上庭園」を刊行して印象的詩風は、異国情調の色彩を加へて、新しい浪漫運動の烽火とあつた。

「天草組」の後も継ぐものは、「南蛮寺門前」、「絵路」。「天竺徳兵衛昔物語」等の戯曲である。「南蛮寺門前」の出た明治四十二年頃としては、これは珍らしい傑作であると言はねばならぬ。そして大正元年、尾上菊五郎が黒猫座の出し物として、二長町の舞台に上演したのが最初のやうである。「天竺徳兵衛昔物語」は木下杢太郎獨特の面白イフアンタスティックな大話とあつてゐる。

大正三年に、社會劇的戯曲「柏屋傳右衛門」が発表された。「この戯曲の基礎を成すべき情調は都会よりやゝ離れる浦曲に於ける徳川末期の文化を残したる寛洞安達なる社會情調にして、後に耶蘇教の思想が併せ齊らしたるロマンチックの西洋趣味並に其情調は、静かなる湖に入る河水の如く之に混じて波瀾を起すものとす」と註してある。多分氏の郷土伊豆伊東を題材としたものであらう。(未完)



隨筆

ペンとメガネ

韓岡 細江

四月も半ば過ぎであつたらうが、こゝ、ハートマウンテンにはまだ吹雪もしたり、淡雪が舞つたりして、道端や物陰にはその凍つた雪が白々としてゐる。けれども高原の陽は流石に春である。暖かである。或るサンデーの朝であつた。うららかに晴れ渡つて誠に気分がよい。私は散歩を思ひ立ち杖をとつて家を出た。道を東にとり、南にまがつて、もうバラツクの赤い野道を歩いてゐた。西の方には例のハート山が麓母のやうな姿でうす霞の中になつてゐる。殆もこのセンターを守るかの様に……

をりから七厘の學校の広場では生徒等が籠球をあそんでゐる。全く平和そのものの眺である。

私は小と句心が浮んで、手帳にとどめやうとしてペンを取り出した。がイヤイヤペンよりペンシルにしよ……とわざわざ取りかへたものであつた。

それからだんだん野面に

出で、路なき路を辿つて東の方に進み、たうたう倉庫街に着いた。立派な各倉庫やいろいろな施設を見て、アメリカである……持てる國である……といふことを感じつつ、鐵道線路に沿うてゲートの方に近づいた。昔々は去年の九月このゲートまぐつてこのセンターにはいつたものである。感慨何ぞ堪えんといつた心持で、



かりかへりかり返り瓜先上りの長い坂道をよつて、自宅に帰ったものであった。私はその日の午後、夜も外出の用事があった。すつかり疲れて仕舞った。翌日ペンを、使はうとしてほうぼう探したけれどどこにも無い。よくよく考へてみるとどうも昨日あの原中でペンをペンシルに代へた時落したのであらうとはじめて気がついた。しかしもう遅い。今日は雪も降つてゐる。あの雪の原にペン一本を落したのが見付からう筈も無い。よしやそのままあつたところが、自分の歩いたところさへさだか亦らぬのに——今更探しに行き勇氣も無い——どう考へても再び私の手に戻るものでは無い——いやでも諦め

なければならぬと観念した。しかしどうも諦めかねる。それといふのは、このペンは三年前女婿Kが私の誕生日にプレゼントとして祝つて呉れたもので、シエラの屋入りで、私の名前が刻つてある。私はその時からそれ迄のペンをやめてこのペンはかりを愛用してゐたものである。途中ペンシルと代へたのも落しては亦らぬと大争をとつた爲であつたのだ。だから惜しくもあり、又Kに對してもすまぬ心持で、それからといふものは袂々として架しまぬ日を送つてゐたのであつた。さういふ日が二週間も續いた後の朝であつた。扉にノックする人があつた。丁度私が出て見ると、二十才前後の一青年である。慇

26

慇に挨拶をして、「こちらにチヨ、フジオカといふ方が居られますか? このペンを落したにかりませんか?」と云ひつつ私に示すのは平いか、私は夢心地で其の時の事情を語り、「それがどうしてあつたの手に」と向へば「僕は農事試験場に働いてゐるのであそこを通りまして之を拾ひました見ればお名前がありますから持つておりました」と至極簡單明瞭に答へて、すぐ歸らうと亦さるから、私はやつとお名前と御住所とを承つてお送りしたのであつた。その翌日もひらひらと雪の舞小日であつた。私は青年の御宅へ御禮に伺つた。が生憎お留守のので、隣室の方に来意を述べ、お願ひして帰つたのであるが、其後

二週間程してから今度は私の不在中、其の青年は再び私を訪ねて来て、先日私の訪ねた事に対する御挨拶と、呉れから出所する暇乞にわざわざ来て下さつたものであつた。何んといふ律義な青年であらう、私はたつた一度お逢ひしただけ、それも私の落したペンを態々持つて来て下さつた其の時に——今後いつ何處でお目に懸る事が出来ようか——聞くところによるとこの青年は實に清原で勤勉力行親孝行者であるといふことである。今どこにどうして居られるか知るよしもないが、必ずや日系市民として立派な歩調をとり進んで居られることであらう。私は朝夕この青年の上に幸あらんことを祈

27

つて己まぬのである。

等<sup>ら</sup>の序に今一つ私は言さ  
度いと思ふ。自分の恥を詰  
るやうであるが……  
之は六月頃のことである。  
或る日は眼鏡を落した。  
あそこで落したと思ふので  
その医長さんに頼んで置  
いたのであるが、どうも行  
衛が知れぬ。すっかり諦め  
て困つて居た。ところが  
遂此頃友達と話し合つた  
に、ふとそのことに及び、  
警察に行つてみましたかと  
いふ。成程、それもさうで  
あつたと相槌は打つたもの  
の、もうそれから三、四ヶ月  
も過ぎてゐるし、老眼鏡で  
もあるし或は落した時こわ  
れたかも知れぬ、いづれに  
しても余り望は持てぬもの  
と私は思つて、すぐ警察

へ行く氣にもなれなかつた。  
が其の後警察の前を通つた  
時、物好半分に一寸立ち寄つ  
て見た。  
係員は数箇の眼鏡を取出し  
て私に示すけれども私のら  
しいのは其の中にもない。  
「今一つレコードの赤い  
がある筈です」と係員は言  
つて、別の處から出して見  
せて下さつた。  
一見私のらしいが違つてカ  
の様にも思へる。かけてみ  
ると完全に私の眼に合ふ。  
スタイルが古型であるのと  
三四ヶ月も使つてゐなかつ  
た為であらう。  
係員は「お待ち下さい、之  
だけはレコード赤しですか  
ら其のまゝお待ち帰りませ  
う。よろしいと丁度」かつ  
た。といふやうな顔をして  
言つて下さる。

私にしてみると只帰つて帰  
るのは何んだか済まぬ心地  
がする。何んとか届け主を  
聞きたい、御禮を述べたい  
しかし今といふわけにやか  
ぬ。私は唯自分の名とア  
ドレスを申置いて有難く頂  
いて帰つたのである。  
オ、今私はこのメガネこ  
のペンを以てこの稿を綴つ  
てゐる。長等を拾つて下ま  
つた恩人二人に對して深甚  
の敬意と感謝を捧げつ、  
さうしてこのセンターに新  
うした清原の人、陰徳の人  
のあることを皆さんと共に  
善む稱へたいと思ふのであ  
る。

一九四二、二、二二



紅の花

良秋

時うつり  
人は愛れど  
春めぐり赤ば  
とはに咲く  
紅の花  
さとり  
家女の人よ  
何を尋ねてか  
山里の丘に  
一人さまよふ  
同じさだめの  
紅の花を尋ねてか  
家女心に咲いた  
紅の花を求めてか  
流るゝ水は  
止まらぬと  
春めぐり赤ば  
とはに咲く  
紅の花



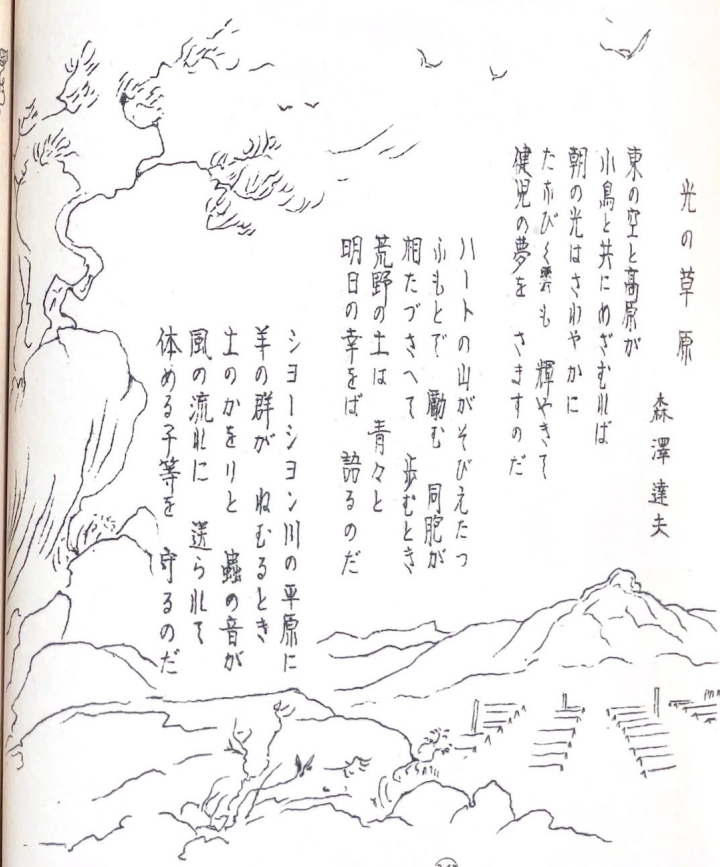
光の草原

森澤達夫

東の空と高原が  
小鳥と共にめざむれば  
朝の光はさゆやかに  
たかびく雲も輝やかに  
健児の夢をさますのだ

ハートの山がそびえたつ  
ふもとで 勵む 同胞が  
相たづさへて 歩むとき  
荒野の土は 青々と  
明日の幸をば 訪るのだ

シヨーション川の平原に  
羊の群が ねむるとき  
土のかきりと 蟲の音が  
風の流れに 送られ  
体める子等を 守るのだ



芝青選

川島初音

朝露の花圃も清しくありけり  
新寒の汽気車に瑠璃き溜み水つゝ

出稼きの女とありて暮る秋  
秋うらぐ相乗り馬車も奥地ある

仇花に終へし高地の秋茄子  
盛り合はす卓の林檎のつややかに

寺田夜山

雁の列リボンの如く籠へり  
遊るピヤノのリズム初寒の花

廣野原小鳥全く没しけり  
二人の手をとんで来り林檎かみ

一行とや、離れつゝ露路の道

藤岡細江

雪の中へ籠へりとか小鳥あり  
心も翔る小鳥は白くハート草原

朝寒のまぶさに咲り野苺の子  
草の露貝と向原ゆめにとりくし

左石木草城

一斤の雲汚れせず天高くし  
秋の蝶美くしければあはれあり

老の秋仕事！疲れを思ふや日も  
貸部屋に親しみ住み秋情む

朝寒や露語が頬うつ湖畔道

菱木英子

丘の上秋の雲とび鳥とび  
山峽の家とびくや林檎熟る

雲谷海にあらはれとつ小鳥あり  
朝露粉に濡れたる林檎地獄まくれし

北風の夜、うぐわすに袖ぐりけり

木下豊生

映画館山で、あはれと夜寒かみ  
旅衣を畳まんとて、こゝろこゝろ

夕ぐせ、小鳥さやく、藪登  
あはれ、あはれ、あはれ

菱木無香  
キーンと渡るケール秋の雲

肩をもて門を閉のたる夜寒か  
相のびて一つとかりぬ露の玉  
日に映ゆる遠き雲の雪や林檎むく



神前茶中

コスモスにこと川さき小鳥赤し  
露涼し朝が朝赤の度手入  
水ケットのマツチ襟は草の實も



藤岡無隠

地を博つて高く翔ちゆく群小鳥  
疾風に小鳥の翼矢のごとく  
前山は地獄色かり秋の屋云  
草の實をつけて尾を振る小犬か  
高原の道なき道や露踏しとい



井上みどり

いさかの庭に蝶々秋のはれ  
スカートの裾にとびつき草虱  
明星の光するどし北の風



岡田季雄

あちこちにがき日向や冬の山  
センターに只だ一つが菊咲けり



堀内和歌子

思ひ出は過ぎし学が舎甘藷を焼  
牡丹赤衣にうけて夜の道



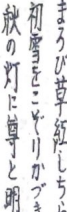
森岡松枝

晴煙の晴れたる空を渡り鳥  
行秋や雲を映して湖静か



金井哲州

甲高き女の聲や芋拾小  
芋拾小芋生群や嬉々として



外田巴川

まろび草紅しちらつく小鳥あり  
初雪をこやりかづきて遠嶺晴  
秋の灯に尊と明治のホトトギス  
やうに濃き空のみどりや雪はる  
子と遊んで出所の母や暮の秋

空絶えて林檎美し角の店  
草の露を嗜むはしり大ハアロー  
釣り上げしツニワトはぬる露の草



尾崎和紫

茄子の露濃き紫に流氷けり  
幼児のしかと抱きし林檎か  
ハート楕の重衣の茜や鳥渡る



山寺かすみ

高原の露赤き畑を耕しぬ  
北風荒れし朝ともなき静寂か  
少しある畑のみどりや小六月



改發 糸女

逝く秋の庭はざりにせし如く  
逝く秋や誰かことのみ聲かしみに  
月の道我が足音のあるばかり



常石睦月

芋掘るや一家総山の山百姓  
草の花笠赤めくえんを足踏みけり  
移り来しハート山根の夜寒か

友情 ユージン・グイモン作 常石芝青譯

土砂を巻きつゝ狂ひ過ぐる  
かの突風も何かある

日光の直射を遮る影さへかき  
樹であつても何かある

たとい生命の血汐が減茶苦茶に  
打ちこぼさるゝとも

尚ほ日々満たさぬて  
生きたる事が出来るんだ  
我たゞ一人の友をかち得ずば

(註) ユージン・グイモン氏はボモナ  
集会所のクリクイエーション部  
の部長であつた





土に還る

「土に還れ、土を愛せよ」  
それは何處より清き出した聲か  
久方の空の彼方から  
連綿たる大陸の思から  
或は人間の胸奥に湧き出た  
覚醒の聲かも知れぬ

虚祭の都の  
空虚な文化生活に破れた  
インテリの群は  
「土に還れ、土を愛せよ」  
を聞いた

若人は早朝  
鎌を擔いで大陸指して出立した

白日の下  
私は大地に跪いて  
一塊の土を握りしめた

久しく、あゝ久しく

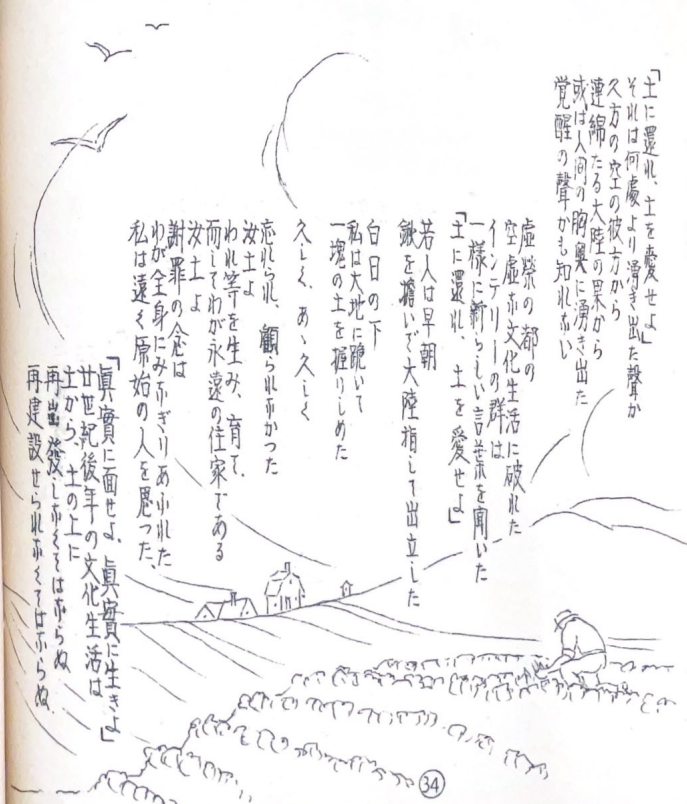
恋れたれ、顧られなかった  
汝土よ

われ等を生み、育て、  
而してわが永遠の住家である  
汝土よ

謝罪の念は  
わが全身にみちみちりあふれた  
私は遠く原始の人を思つた

「眞實に面せよ、眞實に生きよ」  
廿世紀後年の文化生活は  
再出されしやとてはならず  
再建設せらるべきはならず

良秋



内海の思ひ出

岩室寺秋

水牛の背を思はせる、怪

物の様も禿山に取ら圍ま  
て、所謂籠の鳥の生活は  
けてみると、墨繪にある鮮  
麗優美な風景に憧れる。丁  
度沙漠を行く旅人が泉水に  
渴望する様に、殊にワイオ  
ミングの乾燥した灰色の高  
原に暮してゐると、碧い海  
を懐慕する心が頻に疼く。

九月下旬機会あつてヤロ  
ーストン公園に行つた時、海  
抜八千呎の高地に沿線百哩  
餘、面積百三十九哩と云ふ  
見渡す限り渺々綠碧一色に  
塗りつゞる水、對岸の空も  
立波も湖の水平線も辨たぬ  
素敵に廣漠なヤローストン  
湖水を一時に眺めた時は再  
生の思ひあつた。湖水の中  
には黙々と小島が散在して

嶺々が紫り、砂濱には松原

が連るホド瀬戸内海を思は

しむるものがあり、しみじ

み望郷の念を新にした。

六月十日頃から極つた様

に降り出す梅雨が七月上旬

からりと晴れ上ると北う夏

だ。急にカン／＼と焼ける

様亦日が照り初める。街角

には、内海は招くよとか、明

朗優美な瀬戸内海と云つ

た青年の心を吸ふ様亦亦入

夕陽が立ち上る。内海の家

水浴場は一齊に開場して若

人の心は、海へ、海へと碧

海の上に飛ぶ。

ひと夏僕は港からモータ

ー・ボートで或る島の漁村

に遊びに行つた事がある。

瀬戸内海の絶景は到底僕の

拙い筆では描き出せるもの

ではない。次々に現はれて

来る島々を繪小が如く船は

鏡の様も碧い／＼海面を走  
つて行く。空には一翳の雲  
も亦く、空も島も海面も皆  
深い碧である。僕は袖先に  
立つて運轉手に島々の名を  
質しおから、次々眼縁に展  
開して来る絶景に只恍惚と  
して眺め入るばかりである。  
都から来た大公望達と一  
日船頭を雇ひて内海に舟を  
浮べ釣に興じたことがある。  
船に絲を垂れてゐると面白  
い様に釣れる。釣れたギザ  
ミは船底に水を湛え、その  
中に生かして置く。時には  
鱈と云ふ頭に棘があつて見  
るからに妖怪赤い小魚が  
針に掛つて上る。其の度に  
船中は大騒ぎである。油断  
をしやうものからその鋭い  
棘で指をひどく刺されてし  
まふ。針を取外すのに従事  
りだ。實に厄介な代物であ

る。亦時偶腕指位の河豚が  
喰ひ付いて上る。此奴も厄  
介者の一つで針を外すと  
しても容易に外れぬ。一  
生懸命にやつてゐると、小  
一とお腹を狸の太鼓腹の様  
に張らまして今にも弾けそ  
うに亦る。氣味の悪い事と  
云つたらふい。針ごと海中  
に投げ捨て度い心持に亦る。  
釣に厭いで袖先に寝ころ  
んで碧い空を見上げたり、  
岩石から海面の上に生え出  
た面白い船の波濤を眺めた  
りする。夕暮島に歸つてそ  
の目釣つた小魚や近所を買  
つたと云ふ小蛸を料理して買  
つて舌鼓を打つ。  
蛸は蛸壺を海底に投げ込  
んで生取るのであるが、夕  
暮の頃夕日がきら／＼海面  
に滯り中を白い手拭を頭に  
被つた女が櫓を漕いで、男

が縄の附いた蛸壺を海中に  
投げ込んでゐる風景は僅に  
一幅の畫である。蛸壺を引  
上げて見ると、蛸君は自分  
の宮殿にでも納つた氣取で  
壺の中に大きな頭を行儀よ  
く坐らせて意張り返つてゐ  
る。實に蛸は内海の愛嬌者  
ではある。  
朝夕濱辺を逍遙してゐる  
とよく煎魚網を引いてゐる  
のを見る。二艘の船が沖に  
網を打つて両方に別れて港  
指して漕ぎおがら引くのや  
あるが、音頭に合せエー  
ヤラヤ、エーヤラヤの掛声  
勇ましく網を引くのは仲々  
勇壯である。僕も一度船に  
乗り込んで漁師と共に煎魚  
網を引いた事があるが、只  
く揺り作ら引くのさうで  
ある。清に近くまで網を引

くと二艘の船が一箇に上つ  
て網を海面まで引上げるや  
何萬と云ふ煎魚が一ぱい這  
入つてゐる恰も銀をばら撒  
いた様だ。  
島の娘は口娘十六恋心  
と云つて歌にも唱はれ、  
有名であるが島の子供も  
仲々捨て難い詩材を持つて  
ゐる。僕は當時次の様な童  
謡を作つた事がある。

- 濱辺で遊あ
- 島の子は
- 黒い巾
- 禰坊の
- 黒ん坊さんだあ
- 黒ん坊さんの
- 頭は
- 大きいか
- 裸坊の
- お腹は太いか
- 黒ん坊さんは

泳ぎが  
上手だわ

パチヤ〜 やつて  
うまく泳ぐよ

島の子供は  
ホッポ船が  
好きだよ

ホッポ船が着くと  
みお喜ぶよ

この童話で思ひ出すが嘗時都下の女学院の生徒が先生に引率せられ毎日海水浴に来て居た。専門科に家政科を教へてゐたと云ふ某女史は僕がインテリイ青年と見るや、パチヤ〜パチヤ〜やつて泳いでゐる島の子供を眺めながら  
「黒いですね！と感心してゐる。  
「仲々頑丈の様でありませんか！と僕が辨明する

たから徹頭徹尾 はあ！  
はあ！ 御高説御尤至極で  
詳説した事がある。

山の頂に覗いた朝日が静か亦静か亦海面に輝き或は海の彼方に沈まんとする夕日が遠に映じ、その中を帆掛船がゆらりと揺れる風景、夕日が海に沈んだ黄昏頃ポーと淋しい汽笛を鳴らして沖を過ぎ行く船、濱の松原にはもう電燈が淡く煌いてゐる。こんな情景の中に立つてゐるとしみじみ遠く都を離れた小島の感傷に打たれてしまふ。  
こんな追憶の糸をほぐしてゐると際限がない。この邊で筆を揃く。

(俳句) 阿世賀味海  
寒月の西に残れる日の出か  
見違かす波打つ尾根やけの雲

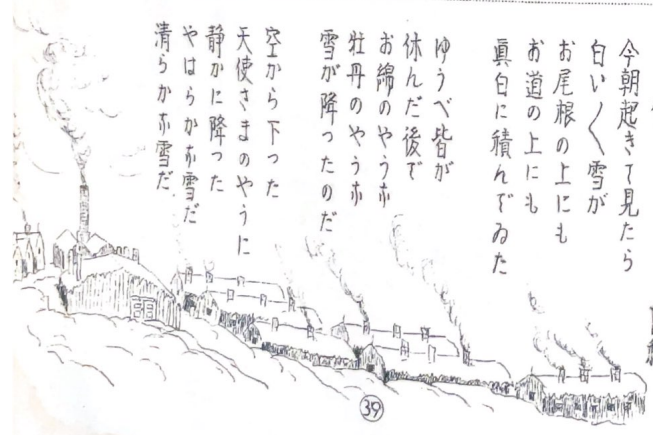
やうに言ふと、彼女は言下に  
に。

「これでは決して眞の健康體と言ふ事は出来ませんね。今少し科学的な栄養を喫へれば完全なものに於るのですけれど、彼女が放壇にでも立つた時の權威ある口吻に於る。そして彼女は例に依つて女学院の宣傳を初める。  
「將來一家の主婦と云つて子供を養育に携はる若い女性には宗教的教養がなくては全くと駄目です。その點私共の学校では生徒の精神教育に重きを置いて居ります」と僕にワイフを貰ふから女学院出身を貰へと言はんばかりである。  
僕はこの偉い先生の主張に反対でも唱へようものから、ひどい目に會ふと思つ

(童話)

今朝起きて見たら  
白い〜雪が  
お尾根の上にも  
お道の上にも  
眞白に積んでゐた  
ゆうべ皆が  
休んだ後で  
お綿のやうな  
牡丹のやうな  
雪が降つたのだ  
空から下つた  
天使さまのやうに  
静かに降つた  
やはらかな雪だ  
清らかな雪だ

良秋





筆隨 鈴蛇の獨語

鷲塚生

吾輩はハート山麓に棲む鈴蛇である。自慢では赤いが末尾にハツの鈴が附いてゐる。して見ると此の世に生を享けて以末ハケ羊といふ事に亦る。人里離れた此の幽境雨寂の山野を我が物顔に悠々滴歩して食ひては寝、寝ては食ひお手のものゝ尾鈴を振るそのカラ／＼と鳴る音は遠く山野に響いて我亦がら無我の境に入る事が屢々ある。然し他の野兎やリス君には此音は禁物と見えて我輩のそれを聞きつけると一敬に逃げ去る。どうもおかしい自分としては別段彼等に害を加ふるといふ譯では赤いが……自惚れの様だが我輩は氣立ての優しい大人しい動物である。

只外見が悪い爲に一般から敬遠され迫害されるのだ。世間には外見及言語動作は立派さうにして居るが心は正反對のものがざらにあるから此の矣。充分に考慮を拂つて貰ひたいものだ。ところが最近邊りが騒しく赤つて来たとき全時に我が蛇社会にとつて一大恐慌が起つた。何に脅されても兎やリス君が側を駆け抜け我輩の午睡の夢を破る事が度重つて来た。と全時に朝市夕亦に鈴音の優劣を競つて居た吾々の仲間が姿を追つて見えなく赤つて来て、不審に思つてゐる矢先、或る麗か赤日、セーゾアラシの根元にトグロを巻いてよい心地で休息してゐると、久しく聞かぬ人声がして近付いて来るものがある。自分

は素早くスル／＼と肉近か赤穴に潜込んで、じつと息を殺して様子は何かと毛髪も眼の玉も黒く低背で、ついで生れて以来見た事の無い黄色い顔の人間共が三三人棒切を以つて邊りをつき廻してゐた。其時、我輩は最近の我同族失踪原因がわかつた。早速、生残りの同族會議を召集して善後策を講じたが、席上仲間の報告によると、彼等人間共は最近遠方から移つて来た人種で、吾々を捕へる目的は吾々が日頃誇りとしてゐる尻尾の鈴にあるらしい。時には無惨や胴体を放切れの上に釘付けにして身柄を引裂き、つまり皮を剥いで刺製にして記念品にするとか、一層ひどいのは胴体を輪切りにして蒲焼とかに

して強壯劑代りに食ひし。こゝにい野暮市人間共に横行されてはやり切れぬ。そして吾々のからだ一ヶに五十仙宛の値段がついてゐるとか。斯様な暴行に對して法律の制裁があつてもよい筈だと思ふ。曰く治安妨害罪、殺人、否殺罪、或は人身、否蛇身賣買罪とか殺へよぐれば際限ないし、法律上の解釋は吾輩には一向わからぬが……。どーれ……兎に角、我身に被害の不幸はつゞき寒く赤つた故又一冬を穴ぐらに潜つて春まで一眠りして、ゆつとり今彼の自衛策でも考へる事にしてよ。嗚呼……もう冬だ！白いものもチラ／＼やつて来た。野にも山にも……。

次読原稿大募集

學術論文  
(但し時事問題を除く)

隨筆  
自由詩

短歌  
俳句

川柳  
小品

七五九日本語編輯部  
ハートマウンテン  
文藝雜誌

日八月一日切締

編輯後記

●本誌の発行は豫定より二週向も遅延した。その理由は多々あるが、何分綜合文藝誌の発行は今回が最初の試みであり、編輯や印刷の上で思ひ掛けた難題を生じ、発行するまでには一難また一難の苦心を重ねた。この難題諸氏の御諒察を願ひ度い。

●本誌を世に送り出すに就いて高柳沙水先生から色々御指導を仰ぎ、セントネル日本語編輯部からは、又テンシル道具一切の使用を提供せられ、多大の援助を受けた。亦エステル石御夫人に表紙やカートを描いて貰ひ、茲に特記して深謝意を表したい。

●本誌販賣から上った総金額は Community Activities 科に文藝雜誌資金として積立て、置き、その中から入用の経費を支出する事にする。

●近日中セントネル文芸人の會合を持ち、本誌を中心にしてハートマウンテン文芸協會なるものを組織したいと思つてゐる。其の幹事は文藝愛好の同志は漏れなく出席せられん事を望むも御願して置く次第である。

編輯者 岩室 吉秋  
大久保 忠榮



ハートマウンテン 川柳吟社 雜詠

露木露日

一物を胸に抱いて水 苦がし  
大地を踏んで生きたい 吾を忍び  
古郷の上を降りたい 氣を潮み  
子が出来て日記一層地味に降り  
明け方の雨へ 昨日の疲勞が出る

帯長 芳夫

人生に挑もう 朝の齒磨粉

襟しみを未だに描く 日々の汗  
節氣の雨の音が好きと 見込まれる  
公然と呑めり 場所の千鳥足  
轉任にシートを板ける 入りの窓

溝口ひかり

辨解は「せせ」と友は笑ひかけ  
又借の掃除もよもに主婦の友  
見物の子席からす、り泣き  
立貴す 竟地も情に開かれ  
荒浪の浮世の舵は風任せ

吉田 晴湖

九州を越へて 開離車やと着き  
往馴れた 頂を 追はれハート山  
沿岸に 帰れとも 秋秋淋し  
四十 年 續けた 日記 焼いて 發ち  
人生の 道草 と なる 収容所

栗原 竹水

山羊草をチエンの長きに喰まわり  
蒼蒼澤が 過り  
何と云ふ 寂寂と 石園直す 母  
姉の 文讀んで 皮肉な 謎を かけ  
湯上りの 乾履 風邪を 氣アはれ

丸瀬 はま子

無い袖が 振れらる 妻の 氣転から  
我儘が 互に 言へる 親密さ  
自己を 知り 向根の 死と 生きる  
欠伸から 乾履と なる 春の 宵  
高麗車に 出られ 仏が 鬼に 化け



伊藤 南畝

公平赤き意見議場に水を打ち  
空想の眼がたどる煙草の輪  
心境の曇りを拂ひ寺詣り  
氣に入った品は値段が躊躇させ  
お勤めに顔丈出して異状ありし

西田 紀一

リンカンに意見もあらう轉住地  
隠忍の覚悟配所の月は笑み  
諦らめた氣配もあり去下ら  
氏族としての覚悟を考へる  
嫁がせて母奪はれた氣にもあり

三原 台以知

責任を持てばと容れる子の意見  
警告報へ持出す品をきめて置き  
高原の日和うっかり賞められず  
キヤンテンのタイムは子だけ知って居り  
誘惑心の對手ばかりも責められず



伊藤 十九男

カクダスの花に無邪氣の手が伸る  
人前で樹ねる強味を子は怡り  
初物は奮合少様に貰れて行き  
鬱憤のやり場に育つ花白  
人生は浮つ沈みつ捨小舟

西田 隆年

青年の意氣配を配所が小過ぎ  
降ろと見て母は慈愛の今を抱き  
口實をやとつとつて敏心に逢ひ  
病める子を連れて涙の後動令  
記念樹の花咲く頃を産衣縫ひ

瀬戸 湖山

明日への希望大きく柵を出る  
表札にたつて木片も見上られ  
配所での生活独りに淋し過ぎ  
せめても慰心安白毎の稽古事  
故華方先生へ代参をして  
代表の重さ御霊へしかと告げ